

やわらかな感性と
自由な発想で生み出される
それぞれの白磁のかたち。

庭むこうにある山では山菜がとれ、
工房横には、さらさらと川が流れている。
静かでのどかな空気の中で、白に向き合う二人の作家がいる。
心の奥底から湧き出る思いを形にする伊藤さん。
繊細で奥行きと深みのある白。

一方、自由な発想で動きのある作品に取り組み長谷川さん。
白は白でもいろんな表情の白がある。
二人は、それぞれのアプローチで白磁の美を追い求めている。

文／中川知英



「練彩鉢」4万円。

心が入っているからこそ生み出される、
色香を感じる、やわらかな曲線。

陶芸家 伊藤秀人さん



「練彩鉢」3万円。

人 は何に心惹かれるのだからか。モノと対峙した瞬間、心に跳ね返ってくる衝撃。それは、決して理屈では語れない。

「白磁の鶴首の花生をつくっていて、自分が納得できるフォルムができたんです。よし、これと同じかそれ以上のものをもって、割合を計算しながらつくると、なぜか形がくずれません」と伊藤秀人さん。割合は同じなのに、どこが違うのか。「何を感じてつくったのかを思い返してみると、口元に花が開いたような瑞々しさをあらわそうと思っていたのに気がついて」。色香を感じるやわらかな曲線は、心で感じたものが手へと伝わったからこそ生まれたラインだったのだ。だからだろうか、伊藤さんの作品には、生き物をもつ体温のような温かさを感じる。練彩もそう。とても伸びやかで呼吸しているかのようだ。

「子どもが拾ってきた貝を見て、なんと美しいのだろうと。こ



なめらかで色香を感じるフォルムの
「白磁花生」6万円。



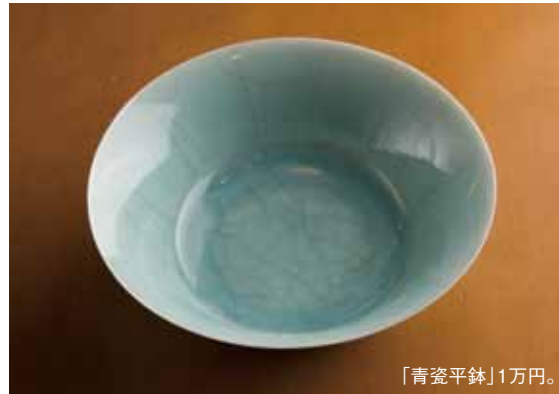
花びらのようなやわらかな雰囲気を持つ
「白磁花鉢」8万円。



指に神経を集中させ、やわらかく轆轤をひく伊藤さん。



「青瓷鉢」3万5000円。



「青瓷平鉢」1万円。



「青瓷ぐい呑」
1万2000円。



「白磁梅瓶」16万円。

ではなかったという強い自信も
もらえたような気がして」。
子どもがうれしさのあまりピヨ
ンピヨン飛び跳ねるように、伊藤
さんの声も大きく弾んでいた。
その弾んだ思いが、どう作品に
表れるのか。何を伝えたいか、気
持ちの入った作品は、見る側に
しっかりと伝わるはずだ。

●プロフィール
伊藤秀人 1971年岐阜県多治見市生まれ。
1991年多治見市陶磁器意匠研究所修了。

●松坂屋名古屋店 美術画廊
5月30日(水)～6月5日(火)

釉薬の美しさと、 深みにはまって始めた、 青瓷の世界。

やきものの里、多治見に生まれ
育った伊藤さんにとって、やきも
のは身近な存在だった。「普段
は、大量生産のやきものをつくら
ている大人たちが、休日に関心
作品をつくり、それらを見せ合
いながら、いいだ悪いだのと楽し

博物院を訪れたという。「乾隆帝
の陶磁器趣味という特別展を見
たのですが、衝撃でした。空気
がとて静かなのに、静けさの中
にある迫力を感じました。モノ
のつ力は凄いなという衝撃と、
自分のやっていることは間違い

の表情は、白磁の美しさに結びつ
けられるんじゃないかと」。そこ
で考えたのが、轆轤の練込。白磁
は、自分の思い描いたラインを轆
轤でひき、削り出してあらわし
てきたが、ろくろの練込は、思い
通りにならない要素ばかり。
「初めは、あー、こんなところに
模様が入っちゃった」だったのが、
土のかたさ、量、ねじれる回数を
調整し、「自分の側に引き寄せて
いく工芸的な作業」をくり返す
ことで、中は白く、外側に模様を
出すことが可能になった。感動
したものを形にしていくな。モノ
をつくり続ける上で必要なのは、
美しいものに反応できるやわら
かな感性なのかもしれない。

そうに言い合っているんです。だ
から、やきものはおもしろいもの
なんだろうなと子ども心に思っ
ていたんですが、実際、ろくろを
ひくと、ほんとにおもしろかったん
です」。
土の塊が花開くように広がっ
ていく。伊藤さんは轆轤に目覚
め、ラインの美しさを大事にした
いという思いから必然的に白磁
を選んだ。白磁花鉢は、白い大輪
の花がたおやかに咲いているよ
うなやわらかさと瑞々しい生命
力に満ちている。

「犬を散歩させながら、花や落
ち葉をよく見るのですが、近く
にむくげの大輪の花が咲いてい
て、それが頭にあっただけでしょ
うね。生命力の強い花が好きなん
です」。最近では、釉薬の美しさと、深

みにも魅せられ、青瓷
にも挑戦している。
青瓷をする上で、どこ
が一番上なのかを見
てみたくて、今年の3
月に台湾の国立故宫